

新しい授業形態に適した教室の机配置についての提案

上田太紀 嶋田衣里 淵上晴登 堀湧喜

Summary

今日の日本の教育はアクティブラーニング形式の授業を推奨している。それに伴い固定化されていた教室の机配置は形を変えていかなければならないと考えた。本校の生徒へ行ったアンケートと古典の授業を使った実践より、アクティブラーニングの主要要素を定め、それに基づく最適な机配置を完成させた。私たちが提案する机配置という新たな観点のアクティブラーニングの研究がアクティブラーニング導入の助けになることを願う。

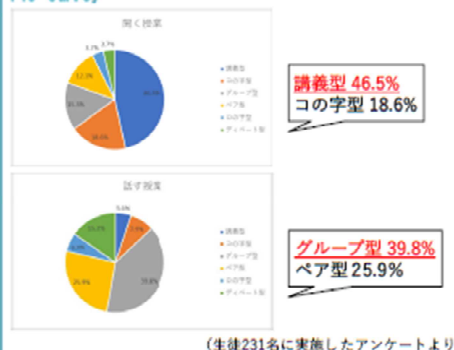
Background

教室内の環境は単純な要素のみで構成されているのではなく、「生徒の発達体系」はアクティブラーニングを用いた授業にその授業が成立するか否かという大きな影響を与え得ることがある。ではどのような授業内容や机配置ならばアクティブラーニングを用いた授業を効果にできるだろうか。予備調査の結果を用いて授業内容と机配置に絞って探求を進めていく。

Methods

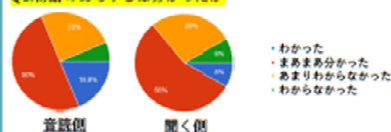
アクティブラーニングの主要要素を定めてグループ学習に適した机配置を提案する。そのために予備調査を行い、まず授業はグループ型、関心型は講義型の形式が好まれているのが分かった。しかし、グループでの会話には必ず関心型が存在している。そこで、古典の授業で行った実験とアンケート調査より探求を進める。

Pre-survey



Results & Discussion

Q1. 物話のあらすじは分かったか



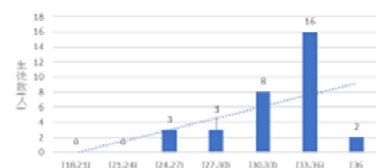
Q2. 何を通して自分の知らないことを知れたか



Reference

文部科学省 資料2 教育課程企画特設委員会
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingaku/shuikyoku3/004/siryo/_ics/Files/afidfile/2020/09/04/1361407_2_4.pdf

アクティブラーニングの効果の得点指数



多くの生徒がアクティブラーニングの効果を実感していることが分かる

机配置の制作

タブレットの導入

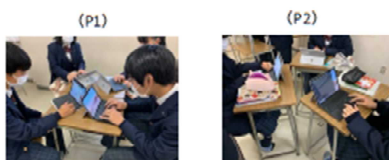
- 研究授業の最後は、グループでのパワーポイントによる発表を行う
- スライドづくり、調べ学習に活かせる

余裕のある空間づくり

- 机の数を最小限にすることで生徒が動ける動線を確保する
- グループで議論、発表準備をしている段階で他の班との交流を促す
- 発表の良い点を真似して、お互いを高め合うことも可能になる

発表練習がしやすい環境づくり

- 机を扇形にホワイトボード近くに設置し、発表の練習がしやすい環境を整えた
- ホワイトボードでKJ法による議論の進行も可能



机2脚に4人や机3脚をトライアングル型に並べるなどして、班員が対面するような工夫が見られた

Conclusion

アンケートの結果から、ディスカッションをALの主要要素と定め、下図のように机を配置することで盛んなディスカッションや他の班との交流も期待できる。これが私たちの提案する机配置である。



オンライン授業は「教える」と「学ぶ」を繋ぐことができるのか。

班員 西田堅信 淵上静姫 宮崎晃成 山鳥太一

研究目的

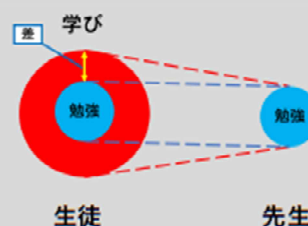
コロナ休校期間でオンライン授業・動画配信の実施

↓ 普段の授業に取り入れることができないか?

- ・普段の授業の質の向上
- ・入院や災害時、コロナウイルスの再来などやむを得ない休みの有効活用

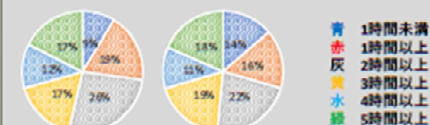
学びとは

- ・対話によって自分自身が変わること



コロナ休校期間中の現状

柏原高校 全国の高校生



参考文献 スタディプラス

勉強時間に大きな差がないことが分かった
一日5時間できていない生徒は8割いた
本校の5時間以上学習している生徒のほとんどが3年生であった

	教師	生徒
量・適切	17人 (85%)	254人 (37%)
・多い	1人 (5%)	417人 (61%)
・少ない	2人 (10%)	12人 (2%)

本校の教師と生徒にコロナ休校期間中の課題についてのアンケートを実施した結果、先生は課題の量に対して適量だと思っているが、生徒は約半分以上が多いと不満を持っている。

意見の相違
「教える」と「学ぶ」が繋がっていない!

オンライン授業の形態

同期型: リアルタイムでの授業
(例: オンライン授業、対面授業)

非同期型: いつでも学習にアクセスでき、全員が必ずしも同じタイミングで学習しない
(例: 授業動画配信サービス)

他学校の取り組み

鎌山郎崎高校: オンライン授業と授業動画配信サービスの融合

岡山県立林野高校: 校内Wi-Fi完備、家庭内Wi-Fi率

瀬高校: 生徒が取り組みやすい形で

神奈川県立川崎北高校: 家庭環境把握のアンケート実施

金海女子高等学校: 平均5時間の学習時間
教師によるリアルタイム授業
教師作成のコンテンツ活用

授業形態の比較

- ・勉強量
どの形態でも本人の意欲によって変化する
↓
強制力の強い形態の方が量が多くなりやすい

強制力が強くなる = 他人の監視下にある

- ・同期型: 監視が弱い (対面授業 > オンライン授業)
- ・非同期型: 監視がない

高 対面授業 > オンライン授業 > 授業動画配信サービス 低

- ・勉強の質
授業に必要な要素

- ・対話
- ・その場で質問ができる
- ・先生が生徒の反応を見る
- ・周囲の反応

- ・対面授業 → 4個
- ・オンライン授業 → 0個
- ・授業動画配信サービス → 1個

考察

オンライン授業は対面授業には替えない!
しかし...
近づけることができる!

オンラインを架け橋に!!

県立普通科高校進学を実現した日系ブラジル人の家庭資源分析 —安達智史論文をモデルとして—

2-1-26 中野 響希

1. 研究動機

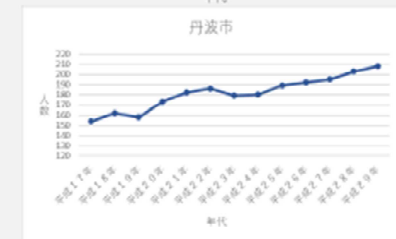
- 1) 小中高校において、外国人生徒の数が増加している
- 2) 日本語を母語としない外国人児童・生徒の教育の困難さがどのようなものであるか関心を持った。
- 3) 在日ブラジル人家庭を研究対象にした理由
 - (1) 在日ブラジル人の教育問題が注目されているという記事を読んだ経験があった。
 - (2) 在日ブラジル人家庭への聞き取り調査がしやすかった。丹波篠山国際理解センターの支援
- 4) 在日ブラジル人同級生の存在

2. 先行研究

- 1) 「ニューカマーの子供たちと学校適応—家庭資源の観点から」 安達智史 社会学年報41号

学校適応に影響を及ぼすもの
(1) 教育資源…両親の学歴 (2) 成員資源…①両親との同居 ②信仰

3. 在日ブラジル人の人口推移



4. 日本在住のブラジル人人口の増加の要因

- 1) 1990年、出入国管理及び難民認定法の改正
- 2) 一時的な滞在（出稼ぎ）を目的とし来日
- 3) 結婚することにより日本で家族を営む人の増加
- 4) 日本人の労働人口の減少
- 5) 国際化で外国人との接点が増えるとともに増える国際結婚

5. 日本人在住のブラジル人が抱える教育問題など

- 教育問題
- 1) 十分な教育支援を受けることができない
 - 2) 不登学、不登校、いじめ、非行、学業の低達成
 - 3) 日本語指導が必要な外国人児童生徒の増加
 - 4) ニューカマーの子どもの進学率
- 家庭問題
- 1) 両親の乏しい日本語能力による親子間のコミュニケーション不足
 - 2) 親子間における経験、価値観の差異
 - 3) ニューカマー家族の離婚率、別居率の高さ
 - 4) 信仰が家族関係の価値規範として根づいていない

6. 安達論文の分析

氏名	学年	国籍	日本語学習期間	母文	親級別	性別	親級別	親級別
102	1年	ブラジル	6年	小学校	高学年	男	父	父
103	1年	日本	13年	小学校	高学年	男	父	父
104	1年	日本	10年	小学校	高学年	男	父	父
105	1年	日本	13年	小学校	高学年	男	父	父
106	1年	日本	6年	小学校	高学年	男	父	父
107	2年	日本	11年	小学校	高学年	男	父	父
108	2年	ブラジル	14年	小学校	高学年	男	父	父
109	1年	日本	13年	小学校	高学年	男	父	父

1. 成績の良いニューカマー生徒の要因
- 1) 日本在住計画期間が長い
 - 2) 両親が水準の高い教育を受けていた
 - 3) 両親と同居である
 - 4) 家族間の価値観が宗教によって根づいている
 - 5) 家庭で日本語も使用されていること

2. 成績の悪いニューカマー生徒の要因
- 1) 日本合計在住期間が短い
 - 2) 両親の受けてきた教育水準の低さ
 - 3) 両親の日本語能力が乏しい
 - 4) 両親が離婚、別居

7. 兵庫県立普通科高校進学者の分析

氏名	学年	国籍	日本語学習期間	母文	親級別	性別	親級別	親級別
A	3年	日本	16年	高学年	高学年	男	父	父
B	2年	日本	17年	高学年	高学年	男	父	父
C	1年	ブラジル	13年	高学年	高学年	男	父	父

- 1) A,B,Cの3人も合計在住期間が長い
- 2) 両親が水準の高い教育を受けてきた
- 3) 両親と同居である
- 4) 家族間の価値観が宗教によって根づいている
- 5) 家庭で日本語が使用されている

8. 結論—6と7の表の比較からの考察

安達論文と兵庫県立普通科高校進学者の要因との比較で一致する因子

- 1) 日本における在住期間が長い
 - 2) 両親の受けてきた教育水準が高い
 - 3) 両親と同居である
 - 4) 家族間の価値観が宗教によって根づいている
 - 5) 家庭で日本語も使用されていること
- 5つの因子が一致したので安達論文の有効性が証明された。

障がい者の自己肯定感を促す環境づくり・障がい者能力の自己開発についてのエスノグラフィー研究

—丹波市市島町の「ら・ばん工房 来古里」とA氏が訪いだ物語—

兵庫県立柏原高等学校 2年 西田 添恵実

- 1) 研究の背景
- 障がい者と健全者の信頼関係に興味を持つ
 - 障がい者就労支援施設の一つである「ら・ばん工房 来古里」を訪問
 - 「ら・ばん工房 来古里」で働くA氏のアルバム写真での表情変化
 - 「ら・ばん工房 来古里」での自己肯定感を促すサポート
 - 丹波市市島町の「ら・ばん工房 来古里」とA氏との関係に着目

- 2) 研究方法
- ① エスノグラフィー研究
エスノグラフィーとは インタビューやフィールドワークを用いて観察し、質的なデータを用いて構造を把握していく方法。
<https://k.med.t.uoi.ac.jp/teaching/ethnography/102/> (2020年11月)
 - ② 厚い記述
もともとは哲学者のギルバート・ライルの用語。ある現象や行為には当該の文化が刷り込まれており、その複雑で多層性をもつ意味の構造や連関を記述すること。『エスノグラフィー—文化人類学—』
→エスノグラフィーが目指すもの 質的データから原因を明らかにしたいと考えた
 - ③ 調査方法
インタビュー・フィールドワーク・アンケート
対象: 「ら・ばん工房 来古里」で働くA氏(発達障がい)
A氏と関わりのある方
→ 「ら・ばん工房 来古里」の責任者のT氏
→ T氏の家族

- 4) A氏の物語を深く使用する質的データを
① A氏の経年写真 ② A氏とT氏へのインタビュー
③ A氏への23項目の質問
→ ①のインタビューをまとめるため、A氏に答えてもらった
④ A氏への自己肯定感に関するアンケート
中学1年生から31歳までの幸せ度と他の人との思い出を書いてもらった



- ①と②の比較
- ・幸せ度: 5→7⇒8 へ上昇
 - ・記述量: 多くなった
 - ・19歳から27歳までの空欄が極端に多い
 - ・内容: 「○○さんと」「一緒に」など他の人との信頼関係による思い出が増えている
- ②③よりT氏が心がけていること
- ・利用者の長所を生かし、自己肯定感を育んでいく
 - ・利用者中心の観感を作る

- 5) まとめ
- ① 疑似家族の出現
A氏によって「ら・ばん工房 来古里」は疑似家族的存在
T氏: 兄 T氏の妻: 姉 (A氏の発言より)
 - ② ①を創り出した要因
・障がい者を一人の人間として向き合う
・A氏のことを理解し、話し相手になる
→A氏によってT氏たちが信頼できる存在になった
 - ③ 人権の普遍的価値へのアプローチ
T氏たちによって障がい者は常に学びの対象
→ほかの人から学ぶことは障がいのあるなしに関係なく、共通して大切

3) 「ら・ばん工房 来古里」の施設としての位置づけ

- ・「ら・ばん工房 来古里」は障がい者就労継続支援B型に属している。
- ・事業内容
パンの製造・発注

丹波市内の就労継続支援B型の比較 (送迎・工賃の2点から)

施設名	住所	送迎あり	工賃(円)	補助金(円)
ニコマルプラス	丹波市外山町	あり	31,776	129
ウェルワークたんば	丹波市 西脇町, 幸町	あり	30,000~35,000	187~214
まらぬまワーク	丹波市	あり	20,347	157
ワークホームあま	丹波市	あり	17,000	142
毎日成角	丹波市	あり	14,000	100
ら・ばん工房 来古里	丹波市	あり	14,000	100
たんば工房	丹波市, 幸町, 西脇町	あり	11,000	84
みつみ学園	丹波市, 幸町, 西脇町	あり	10,900	79
メガマルガーデン	丹波市	あり	10,000	178

障がいのある方々のための就労支援施設ガイド「丹波市ホームページ」(2020年10月)
※空欄はデータなし
※年齢は1か月4週と考えると計算

表より、「ら・ばん工房 来古里」の施設の整備や工賃は他の施設と比べて突出しているわけではない。
→「ら・ばん工房 来古里」でA氏が自己肯定感を育んだのは施設の物理的要因ではない別の要因がある
→エスノグラフィーによる質的なデータから要因を明らかにしたいと考えた

④より Ⅰ) 「ら・ばん工房 来古里」入所前

	中学1年生	中学2年生	中学3年生	高校1年生	高校2年生	19歳	20歳	21歳	22歳	23歳	24歳	25歳	26歳	27歳
家族と	5	6	4	5	7	4	5	6	7	5	5	3	3	3
学校で														

Ⅱ) 「ら・ばん工房 来古里」入所後

	28歳	29歳	30歳	31歳
幸せ度	8	7	3	8
家族と				
学校で				
T氏と	5どりの生地で一緒に特製した	一緒にパンの製造に行った	特製したパンを一緒に特製した	一緒にパンの製造を行った
T氏の妻と	1歳前初めに自己紹介をした	ノートに書いた好きな音楽を一緒に聞いてくれた	好きな音楽を一緒に聞いてくれた	5どりの生地で一緒に特製した
T氏との子どもたちと	ちゃんと握手ができた			
F氏と	会ったらいっしょにスキャンニングしてくれる	一緒にスキャンニングをした	好きなアニメのグッズができた	買ったことがあった
O氏と				買ったことがあった
「ら・ばん工房 来古里」の仲間たちと				練習に分かりやすく仕事を教えた
「ら・ばん工房 来古里」の職員さんと				楽しそうに話を聞いてくれた

児童養護施設で生活する高校生への 進路保障支援体制の現状と課題について

兵庫県立柏原高等学校 岩元 真愛

1. はじめに
1) 研究の動機
児童養護施設で暮らす子供たちのフィクションの本や漫画は、全てネガティブに書かれており、実際の児童養護施設の現状はどのようになっているかを疑問に思ったため。
2) 児童養護施設とは
「保護者のない児童、虐待されている児童など、環境上養育を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせて退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行うことを目的とする施設」(児童福祉法第41条)
3) 兵庫県内の児童養護施設の概要
施設数：31個 (神戸市：14個 姫路市：4個)
平均入所定員数：49人 全国：54人
<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisaku/seisaku/entry/2.html> (2020年12月)
<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisaku/seisaku/entry/2.html> (2020年12月)

2. 児童養護施設で生活した高校生の進路先
1) 全国の該当高校生と非該当高校生の比較 (2018年)

* 進学の内訳は、高等教育機関すべてを指す。
<https://www.kakuhokodataset.com/chart/2398> (2020年12月)

4. 児童養護施設で生活する高校生の進路保障支援体制の法的整備とその課題
1) 2000年代における法的に改善された点
2003年：児童福祉法の改正による市町村における子育て支援事業の実施
http://www.city.ohyama.lg.jp/ohyama/ohyama_saijogaku/05-115_2031.pdf (2020年12月)
金銭面に余裕が生まれ、進学がしやすくなる。
2) 2015年：児童福祉法による支援の対象年齢が「18歳未満」から「20歳未満」に変更
<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisaku/seisaku/entry/2.html> (2020年12月)
施設を出た18歳の貧困を防ぐ。
3) 2018年：国、自治体が提供する進学一時金以外にも、企業が提供する奨学金、学校独自の制度を合わせると約150種類もある
http://www.sanshou.go.jp/shimane/w30_saitokkhu.pdf (2020年12月)
高等教育機関への進学にあたって、金銭面の負担が減る。
4) 2022年：成人年齢を18歳に引き下げる
<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisaku/seisaku/entry/2.html> (2020年12月)
18歳で施設を退所したとき、その時点で様々な契約ができるようになる。
3) 今後、改善していかなければならない点
・経済的なサポートは、充実してきているが、**心理面のサポート**が為されていない。

6. 提言：児童養護施設で生活する高校生への進路保障支援体制の改善に向けての法整備に向けて
1) 経済的支援体制…改善されつつある
2) 心理的支援体制…いまだサポートは為されていない。
3) 課題の克服に向けて…**里親制度**について

3. 児童養護施設で生活する高校生への進路保障の実態
～手記の分析より～
1) 1999年の手記の分析 (15人中)
・進路について明記のない人が多い。(11人)
・奨学金についての話がほとんどない。(14人)
・施設の職員、規則についての不満が多く記載されていた。
・いじめ、施設に入っていることを周りに打ち明けられないなど、マイナスのエピソードがあった。

2) 2012年の手記の分析 (21人中)
・進路についてほとんどの人が明記している。(18人)
・高等教育機関を卒業後の進路先まで書かれている。(8人)
・奨学金を使用した人がいる。(5人)

3) 1999年から2012年の比較
・児童養護施設で暮らす高校生の児童養護施設の**イメージが向上**している。
・進路について**ポジティブな印象**を抱いている。
・奨学金等の使用が増え、進学率が格段に上がっている。

1999年 子どもが暮る施設の暮らし 出版：明石書店 (15人)

施設名	入所期間	生活環境	出来事	感想
児童養護施設A	1997年10月～1998年9月	24名	24名	24名
児童養護施設B	1998年10月～1999年9月	24名	24名	24名
児童養護施設C	1999年10月～2000年9月	24名	24名	24名

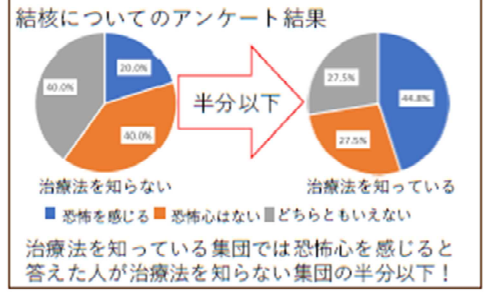
2012年 施設で育った子どもたちの語り 出版：明石書店 (21人)

施設名	入所期間	生活環境	出来事	感想
児童養護施設D	2001年10月～2002年9月	24名	24名	24名
児童養護施設E	2003年10月～2004年9月	24名	24名	24名
児童養護施設F	2005年10月～2006年9月	24名	24名	24名
児童養護施設G	2007年10月～2008年9月	24名	24名	24名
児童養護施設H	2009年10月～2010年9月	24名	24名	24名
児童養護施設I	2011年10月～2012年9月	24名	24名	24名

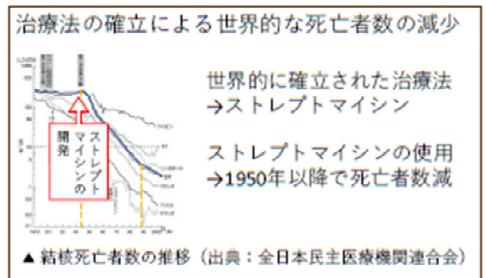
感染症に対する人々の認識の変化について -旧県立柏原荘 (結核療養所) を事例として-

兵庫県立柏原高等学校 木村 陸生

研究動機
新型コロナウイルス罹患患者への差別に関するニュースを見て、その原因と差別をなくすにはどのようにすればいいのを考えていたため



仮説
仮説1 感染症に対する恐怖心が罹患者に対する差別を引き起こす
仮説2 人々が確立された治療法を知ることで恐怖心がなくなり差別意識が解消される



結核に対する治療法(ストレプトマイシン)の確立前と確立後の結核患者に対する認識の変化
(治療法の確立前) …結核患者への差別(1940年代後半)
参考：文芸誌『たかの風』第十四号
2020年3月1日多町文化連盟発行

1. 家族であっても会うことが許されない
2. 使用した食器・衣類の処分
3. 患者の療養に用いた小屋を焼却

(治療法の確立後) …差別の解消(1960年代後半)
参考：元結核患者で兵庫県立療養所柏原荘へ入所したA氏多町多町町在住への聞き取り調査より

1. 患者への面会が可能
2. リハビリとして療養所外への散歩の許可
3. 被差別感を感じなかった



検証結果
(1)結核の治療法の確立によって患者が減少し両病院とも1960年代に総合病院化した
(2)総合病院化が進む中で元結核療養所という意識が人々からなくなった
(3)(1)の総合病院化とともに(2)のような意識の変化によって2010年代には両病院とも人家から離れた場所からアクセスのよい平地に移動していった

新型コロナウイルスによる差別を考察
新型コロナウイルスによる差別はなくなるか
(1)新型コロナウイルスへの有効な治療法が確立されていない
(2)新型コロナウイルスへの恐怖心がある
→現時点では差別の完全な解消は困難
新型コロナウイルスの差別に対し我々がとるべき行動
(1)結核差別において科学的根拠のない情報による恐怖心は差別を生んできた教訓を生かさなければならない
(2)新型コロナウイルスに関係する事象に対しては科学的根拠をもとに冷静に対応する必要がある

参考文献
① 結核 歴史 1997年10月～2012年9月 明石書店
② 結核 歴史 1997年10月～2012年9月 明石書店
③ 結核 歴史 1997年10月～2012年9月 明石書店
④ 結核 歴史 1997年10月～2012年9月 明石書店
⑤ 結核 歴史 1997年10月～2012年9月 明石書店
⑥ 結核 歴史 1997年10月～2012年9月 明石書店
⑦ 結核 歴史 1997年10月～2012年9月 明石書店
⑧ 結核 歴史 1997年10月～2012年9月 明石書店
⑨ 結核 歴史 1997年10月～2012年9月 明石書店
⑩ 結核 歴史 1997年10月～2012年9月 明石書店